

# 2023 ズバリ! 的中



# 世界史

## 関西大学

問題のリード文および空欄補充問題がズバリ的中

### 入試問題

2月5日実施 全学日程2  
〔II〕(A)、問2

〔II〕 次の文の( A )～( D )に入れるのに最も適当な語句を下記の語群から選び、その記号をマークしなさい。また、問1～6に答えなさい。

アジア人として初めてノーベル賞(文学賞)を受賞したラビンドラナート=タゴールは、ムガル帝国滅亡から3年後の1861年にベンガル州のカルカッタで生を受けた。彼は、詩人としてのみならず、活動家、思想家、作詞・作曲家としても多くの事績を残した。近代インドを代表する世界的な知識人であった。彼の代表作『ギーターンジャリ』は、ベンガル語で書かれたが、タゴール自身が英訳し、アイルランドの詩人で、後に同じくノーベル文学賞を受賞することになるイエイツが寄せた序文とともに出版された。タゴールは、非暴力を掲げた( A )が指導者となったインド独立運動を支持したことで知られるが、かつては彼自身も、1905年にイギリスが発表した( B )に反対して、民族運動の最前線に立ったことがあった。知識人としての彼に目を向けると、フランス出身のノーベル文学賞受賞作家で、平和主義、反ファシズムの思想家でもあった( C )や、ドイツ生まれのユダヤ系理論物理学者で、相対性理論を打ち立てた( D )との親交が目される。1950年以來歌われ続けている現在のインド国歌はタゴールの作詞であり、現在のバングラデシュの国歌もまた彼の作詞であるが、その採用はこの国が独立した⑤1971年のことであった。

〔語群〕

- |                |                  |           |
|----------------|------------------|-----------|
| (ア) ヘミングウェイ    | (イ) トーマス=マン      | (ウ) ネルー   |
| (エ) ジンナー       | (ロ) ローラット法       | (ク) ガンディー |
| (カ) プールナ=スワラージ | (ク) スタインベック      | (ケ) マイヤー  |
| (コ) チャンドラ=ボース  | (イ) インド統治法       |           |
| (シ) ベンガル分割令    | (ス) ラーム=モーハン=ローイ | (セ) フロイト  |
| (ソ) ロマン=ロラン    | (ジ) ヘルムホルツ       |           |
| (タ) アインシュタイン   | (ツ) レントゲン        | (テ) コッホ   |

問2 下線部②の地域をめぐって現地勢力および西洋列強の間で1757年に行われた戦いとして最も適当なものを次の(ア)～(イ)から一つ選び、その記号をマークしなさい。

- |              |               |             |
|--------------|---------------|-------------|
| (ア) シク戦争     | (イ) マイソール戦争   | (ウ) マラーター戦争 |
| (エ) ブラッシーの戦い | (ロ) カーナティック戦争 |             |

### 河合塾

直前講習  
関大世界史突破テスト  
〔III〕(5)、(8)

〔III〕 次の文の( 1 )～( 10 )に入れるのに最も適当な語句を下記の語群から選び、その記号をマークしなさい。また問1～5に答えなさい。

中央アジアからインドに侵入したパープルは、1526年にバーニーバットの戦いでロデー朝を破り、ムガル帝国を建設した。ムガル帝国の第3代皇帝( 1 )は、ヒンドゥー教徒との融和をはかり、非ムスリムに課されていた人頭税(ジズヤ)を廃止した。その後、ムガル帝国の領土は第6代皇帝( 2 )の時に最大となった。しかし( 2 )はイスラーム教に深く傾き、ヒンドゥー教徒に対する人頭税を復活させ、ヒンドゥー教寺院の破壊を命じた。このため、17世紀後半にシヴァージーによってインド西部に建てられた( 3 )王国がムガル帝国に対抗するなど、強い反発が生じた。( 2 )が没すると、各地で台頭した軍事勢力の自立が進み、ムガル帝国は衰退していった。イスラーム政権の支配の下で、インドではイスラーム文化とヒンドゥー文化との融合が進み、インド=イスラーム文化が開花した。

18世紀になると、ムガル帝国の衰退に乗じてヨーロッパ諸国のインド進出が活発化した。特にイギリスとフランスは、インドでの利権をめぐって相互に対立を深めていった。ヨーロッパにおける( 4 )戦争中に起こった( 5 )年のブラッシーの戦いで、イギリス東インド会社は書記の( 6 )の貢献もあってフランスとベンガル太守の連合軍を破り、インドにおけるフランスとの植民地戦争で優位に立った。その後イギリスは、インド各地の勢力を個別に破って支配を拡大し、19世紀半ばに( 7 )戦争でパンジャブを併合して、インド征服をほぼ完成させた。イギリスはインドの反英運動を抑えるため、1905年に、ベンガル分割令を施行してヒンドゥー教徒とイスラーム教徒の分断をはかり、さらに国民会議派に対抗させる目的で、1906年に全インド=ムスリム連盟の結成を支援した。全インド=ムスリム連盟は第一次世界大戦中、自治を目指して国民会議派と提携し、大戦後のローラット法やインド統治法に反対して( 8 )の第1次非暴力・不服従運動に協力した。

〔語群〕

- |                  |              |              |
|------------------|--------------|--------------|
| (ア) 1744         | (イ) 1757     | (ウ) 1763     |
| (エ) アイバク         | (ロ) ネルー      | (ク) カーナティック  |
| (カ) カシミール        | (ケ) マラーター    | (コ) スペイン継承   |
| (シ) アッサム         | (ソ) マイソール    | (タ) アクバル     |
| (チ) 七年           | (リ) オーストリア継承 | (テ) マフムード    |
| (ツ) ラーム=モーハン=ローイ | (ニ) シク       |              |
| (ク) クライヴ         | (ホ) ガンディー    | (イ) テイラク     |
| (ケ) ウルグ=ベク       | (ロ) ジンナー     | (ウ) ヴィジャヤナガル |
| (セ) ジョゼフ=チェンバレン  | (エ) シンド      | (オ) デュプレクス   |
| (ソ) アウラングゼーブ     | (カ) シンド      |              |